

2026年3月1日 受難節 第2主日礼拝メッセージ

「命の道を歩む」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 3章 10-12、20-35 節

早くも今日から3月が始まりました。2月はあっという間に過ぎていったと思ったら、その2月末の昨日、アメリカとイスラエルがイランを攻撃し、それに対してイランも反撃し、再び戦争が始まったとのニュースがあり、大変驚きました。アメリカのトランプ大統領は、「イランの国民の自由を守るために」と言っていますが、今年1月のベネズエラ侵攻も、今回のイラン攻撃も、トランプ大統領自身のスキャンダルが暴かれることから、世間の目を逸らすためにあちこちで戦争を始めているという見方もあります。爆撃された現場で犠牲となった一人一人の命、また上官の命令で戦地に赴いていく一人一人の人の命というものが、全く顧みられておらず、単なる駒や数字としてしか扱われていないことに怒りを感じます。

ロシアとウクライナの戦争も、イスラエルの戦争も、イランも、日本からは遠く離れた国や地域のことであり、私たち自身の生活実感としては、まだまだ「どこか遠くで起きていること」であって、「自分事」としての実感がなかなか持てないことかもしれない。ですが、少なくともニュースで報じられるごとに、以前のように驚かなくなってしまうくらいに、感覚が鈍く、麻痺してきているのだらうと思います。世界の多くの国々が再軍備、軍拡の方向へと舵を切っている中で、平和憲法を有しているはずの日本も、来月4月からは防衛増税が始まります。表立って気付かぬうちに、もうすでに戦争に向かって、着実に進み出していることに恐怖と憤りを感じています。

このような報道がなされるまでは、2月に約半月間に亘ってイタリアで行われていたミラノ・コルティナ五輪のことばかりが、盛んに報じられていたように思います。かつてはスポーツの世界大会というと、オリンピック以外にはあまり無かったかと思いますが、今ではたくさんの競技で世界大会がいくつも開催されています。また5年前の東京五輪だけに限らず、世界中で五輪と裏金、汚職や談合の問題は尽きません。それでも、なお「スポーツの祭典」としてオリンピックが続けられ、パラリンピックが続けられているのは、根深く張り巡らされた利権構造と、それによって人々の耳目を集め、社会問題から目を逸らせるため、また人々の中に溜まった

政治的不満のガス抜きをするための装置として、上手に利用されているからなのだろうと思います。

とはいえ、一生懸命に練習を重ねて来られた選手たちの、それこそ常人離れしたすばらしい演技には、舌を巻き、感動を覚えるものも多くあるのも事実です。とりわけ個々の選手たちの、そこに至るまでのエピソード、怪我やスランプを乗り越えての七転び八起きのようなドキュメンタリーを見ると、人間の持つ可能性や素晴らしさに素直に感動を覚えます。しかし、残念ながら、そのような感動は一瞬で過ぎ去っていきます。日々に世界中では何百、何千、何万という数の新しい番組や動画が作られ、情報が垂れ流されて、洪水のように押し寄せ続けています。そのような現代社会の中では、アスリートが磨き上げた競技・演技も、天才と呼ばれる職人や芸術家による作品も、すべてのものが一瞬で消費されて流されていっています。

そこでは「感動」は、もはや一時の「興奮」や「刺激」に過ぎなくなっています。そのために感動するのも手早く簡単ですが、飽きるのもまた同様に早く簡単になっています。そして、その結果、「より面白いもの」へ、「もっと感動するもの」へと、次から次へと絶えず刺激を求め続けるような消費行動が身についてしまう……。それはもはや一種の「中毒」「依存症」とも言えるのではないのでしょうか。スマホ中毒やゲーム依存症が、世界的な問題となっている中、自分の生涯をかけて打ち込んできたスポーツや芸術という人間の営みもまた、単なる一つの「コンテンツ」として人々によって消費されていく……。消費されていく側にとってみると、それはまさに「命を食べ物にされている」ことであり、命が大切にされないという意味では、戦争とさほど変わらないのではないかとさえ思います。人と人とが本当の意味で、出会い、お互いの命を大切にし合い、活かし合う関係とは、どのようにして生まれ、そして育まれていくものなのでしょう。

今回の聖書のお話は、2000年前のイエス様の時代ですら、そのことは難しかった、ということを表わしています。「マルコによる福音書」3章の10節には、「イエスが多くの人を癒やされたので、病苦に悩む人たちが皆、イエスに触れようとして、押し寄せてきた」とありますが、この場所は2章からの流れで考えると、ガリラヤ湖の湖畔の町カファルナウムでした。イエス様の癒しの業の噂を聞きつけて、病苦に悩む多くの人々がイエス様のもとに押し寄せました。前の7節8節によると、「ガリラヤだけではなく、南のユダヤからも、さらに南のイドマヤ、ヨルダン川の向こ

う側、さらに北側のテイルスやシドンからも多くの人々が来ていたようです。そこにはユダヤ人やユダヤ教徒だけではなく、いわゆる異邦人や異教徒の人たちも多数含まれていました。

当時のユダヤ教の考え方、文化、社会通念では、病気や障がいなどは、その人自身かもしくは先祖の誰かの罪のせい(ヨハネ 9)であったり、もしくは悪霊や汚れた霊に取り憑かれたりしたせいだと考えられていましたから、それらの病苦を抱えた人たちは、汚れが移らないように、周囲の人たちからも接触しないように、忌避されていました。しかし、そのような中でも、イエス様は「来るものを拒まず」で、それらの人々に手当てし、その結果として癒されていくことがあったようです。汚れた霊たちは、「イエスを見るとひれ伏して、『あなたは神の子だ』と叫び、イエスは、自分のことを言い触らさないようにと霊どもを厳しく戒められた」(12)とありますが、これは「一生懸命に秘密にした」ということよりも、「イエス様の思いに関係なく、どんどんイエス様のもとにやってくる人々が増えていった」ということを、印象的に表した表現なのだと考えられます。

そのように多くの人々に求められていたイエス様ですが、20 節以降と 31 節以降では、家族や親族、身内の人たちとはあまり関係が良くなかったということが伺えます。とくに 21 節には「身内の人たちはイエスのことを聞いて、取り押さえに来た。(なぜなら)『気が変になっている』と思ったからである」と、とても厳しい口調で記されています。22 節から 30 節は、イエス様の敵対者として福音書の中で描かれている律法学者たちとの討論が書かれています。「人にはできないことをやっているなんて、あの男は悪霊(ベルゼブル)に取り憑かれているに違いない」という律法学者たちに対して、「悪霊の力で悪霊を追い出していたら、それは内輪もめではないか。そんなわけないだろう」と言っています。

そして、最後に「人の子らが犯す罪やどんな冒瀆の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠の罪に定められる」と言いますが、これは「聖霊と共におられるイエス様だけは特別です」と言っているわけではありません。「人の子」(28)とは、イエス様のことではなく、私たち人間一般、「誰でもみんな」という意味です。そして「聖霊を冒瀆する者」とは、「イエス様に悪口を言う人」という意味ではなく、全ての命の中に聖霊が生きて働かれているにも拘わらず、そのことには目もくれず、ただ「律法」によってのみ、その律法を守ることができ

ない社会的状況にある人たちを皆、一方的に「罪人」と呼び、断罪すること。そのような律法学者たちの言葉と振る舞いこそが「聖霊を冒瀆していることに他ならない」というイエス様の憤りの込められた厳しい言葉だったのだろうと理解することができます。

当時のユダヤ社会の中で、人々から尊敬され、権威を持っていた律法学者たちに、正面から立てつき、彼らを敵に回すなんて、それこそ非常識なことであって、村八分にされかねないことだったでしょう。だからこそ身内の人たちからも、「気が変になっている」と言われていたのだろうと考えられます。しかし、イエス様は「私の母、私のきょうだいとは誰か」(33)と言われ、周りを見回して「見なさい。ここに私の母、私のきょうだいがいる。神の御心を行う人は誰でも、私の兄弟、姉妹、また母なのだ」(34-35)と言われました。ほとんどの人が「どこの家の出身・所属で、父親の名前は誰」と名乗ることが当たり前だった時代、父親不明で「あのマリアの子」(マルコ 6:3)としか呼ばれなかったイエス様だったからこそ、地縁にも血縁にもよらない人と人との真のつながり合いを言うことができたのではないのでしょうか。そこではユダヤ教を信じているか信じていないかすら、もはや問題ではなく、あるのはただ「神の御心を行う」(35)ことのみでした。つまり、人が人として大切にされていない状況の中で、人を人として大切にすること、そこにこそ命の神が紛れもなく共におられるということに、イエス様は信頼して、身をもって歩まれたのだと思います。

一見すると、その道は美しいように見えるかもしれませんが、実際はそうではありません。人が人の上に立ち、人を消費し浪費し、そして時に人の命を奪うことすら、当たり前であって、「良し」とされる世の中で、それらを否定することは、非常識であり、「気が変になっている」とすら言われかねないことです。そして実際、イエス様はそれが故に、身内からも理解されることなく、十字架へと続く茨の道を歩むことになりました。けれども、同時にその道は十字架で終わりではなく、その後へと続いていく命の道でもありました。

多くの情報が交錯し、どの道を進めばよいのかが分かりづらくなっている現代において、私たちは道を誤ることがないように、イエス様の後に従って、真実の命に至る命の道へと、今日も歩みを進めて参ります。